

聖書箇所：マタイの福音書2章13～23節

説教題：悲しみをともにされる主

## 1 ヘロデ

少しここまでのことをおさらいしてから、今日の箇所を見て参ります。

あるとき、外国に住んでいた博士たちは、救い主がお生まれになったことを示す星が夜空に輝いていることに気がつきます。すぐに救い主を捜し出す旅に出ました。彼らはエルサレムに着いたときこう叫びました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。」

当時、ユダヤ人の王として君臨していたのはヘロデと呼ばれる人です。いつの世もそうですが、王座を巡って様々な権力闘争が行われています。ヘロデも例外ではありません。少しでも怪しい動きがあれば、いち早く情報を察知し、直ちに行動に移す。そうやって彼は自分の地位を勝ち取ってきました。まさにこの場合もそうです。博士たちがエルサレムの町の中で叫んだことばが、ヘロデの耳には自分の地位を奪おうとする者が現れたと聞こえました。ヘロデはすぐに博士たちを呼び出し、問いただします。「お前たちはいつその星を見たのか。」博士たちは答えました。「今から二年前です。しかし、どこでお生まれになったのかはわかりません。」ヘロデは前もって聖書の専門家たちを集め、キリストがどこで生まれるのか聞き出していました。そこでヘロデは、博士たちにおいしいえきを与えます。「ベツレヘムという町に行ったらきっと見つかるだろう。」そしてこう付け加えます。「行って幼子のことを詳しく調べ、

わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。」

博士たちを使って幼子を探し出させ、勞せずして居場所を突き止めようという魂胆です。博士たちはヘロデの悪賢い計画には気がつきません。まことに正直にヘロデと約束をしてベツレヘムに向かいます。間もなく、星に導かれるようにして、彼らは幼子に出会うことができました。

博士たちは自分たちの国に帰るときになって初めてヘロデの隠された魂胆を知らされました。このままエルサレムに戻るわけにはいきません。ヘロデに気がつかれないよう、わざわざ遠回りして帰ります。これが2章12節までのあらすじです。

## 2 幼子とその母のために働くヨセフ

一方、ヨセフにもヘロデの幼子暗殺計画が明らかにされました。ベツレヘムにこのままとどまっていたのは危険だから、すぐにエジプトに逃げるようにと指示されます。ヨセフたちは、望んだわけでもないのに、ヘロデの権力闘争の渦に巻き込まれてしまいました。出産からそれほど月日が経たないうちに、三人はエジプトに逃げていきます。

エジプトへの出発は夜中でした。文字通りに夜逃げの状態です。誰も見送る者がいません。惨めな思いはなかったのでしょうか。不安はなにもなかったのでしょうか。そんなことはないはずです。たとえ主の使いが夢の中に現れ、主のご計画を告げられたにしても、

これからどうなっていくのか、ヨセフとマリヤの頭には不安がよぎります。救い主ゆだねられた自分たちではあるけれど、本当にこの幼子を守り通すことができるのか、自信があるわけではありません。一家は運命に翻弄されるようにして、エジプトに逃れ避難民として隠れ住むことになります。

それから数年が経ち、ヘロデが死んだのでイスラエルに戻りなさいと告げられたときでさえ、まだ危険が残っていました。マリヤとヨセフはエルサレムに近づくことはできません。気がつかれないように自分たちの故郷であるナザレに戻っていきました。

ベツレヘムでの出産、そこからエジプトに逃げ、そしてナザレに移り住む。生まれたばかりの幼子を抱え、緊張した生活を強いられます。その中でヨセフは一生懸命働いているように見えます。そんなヨセフに神は夢をとおして励ましを与えてはいます。でも、その語り方は独特です。例えば13節を見てください。「立って、幼子とその母を連れて」とあります。ここだけではありません。何度も「幼子とその母」と呼ばれています。決して、「幼子とあなたの妻」とは言われることはありません。あくまでも「幼子とその幼子の母」なのです。

ちょっと冷たい言い方をするなら、神のご計画が減し遂げられていくために、ヨセフはその道具に過ぎない。そんな扱われ方に見えてしまいます。ヨセフの人生よりも、神のご計画だけが大切だということでしょうか。

マリヤだってそうです。神のひとり子をお腹に宿し、自分の子供として育てるという榮譽を与えられはしました。でも、マリヤはやがて自分の子供が十字架につるされる現場に立ち会うことになるのです。そこで心が張

り裂けるほどの悲しみを味わうことになるのです。

いったいヨセフとマリヤの人生を神はどのように考えておられるのでしょうか。そんな疑問がわき起こります。

### 3 子を殺された母たちの嘆き叫ぶ声

疑問はそればかりではありません。16節を読みます。「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこつて、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。」

ヘロデは確かに冷酷な男だったかもしれませんが。しかし神は万能のお方ではなかったですか。このヘロデのやることをどうして止めようとされないのでしょうか。イエス・キリストはエジプトに逃れて助かったけれど、他の子供たちは殺されてしまいました。神は、救い主だけが大切であつて、それ以外の子供たちのことには関心がないのでしょうか。

それに加えて、17節でわざわざこんな言葉まであるのです。「ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。」

エレミヤと呼ばれる預言者をとおして語られた言葉です。殺された子供たちの母親たちのことをラケルと呼んでいます。ラケルは慰められることを拒みました。子供を失った悲しみは、どんな言葉によっても慰めることができません。子供を持つ親であるならこのことは理解できるはずです。

神はエレミヤをとおして、救い主がお生まれになれば、このようなことが起こることを

あらかじめ語っていました。ご存じだったということですか。知っていながら、どうして止めないのでしょうか。どうしてラケルが泣き叫ぶことをお許しになるのでしょうか。

#### 4 神はどこにおられるのか

二千年前のことだけではありません。今の時代もラケルの悲劇は繰り返されています。戦争で子供を失う親たちがいます。あるいは逆に、紛争やテロによって子供たちの目の前で親たちが殺されていきます。神はどこにおられるのでしょうか。

戦争だけではありません。幼いうちから入院生活を余儀なくされ、学校にも行けず病院のベッドで病氣と闘っている子供たちがいます。治療の甲斐もなく、子供たちが死んでいきます。子供を何とか助けたいと願う親たちの心を神はご存じないのでしょうか。いったい神はどこにおられるのでしょうか。

神を信じている私たちがさえ、理不尽な苦しみが襲ってくる時、神はどこにおられるのか、神は何をしておられるのかと叫びたくなります。この箇所において、神の御心はどこにあるのかと私たちは考えさせられていきます。

そのことを考える大前提があります。

神は、マリヤとヨセフにこう語っておられました。「この方こそ、ご自分の民をその罪から救って下さる方です。」イエス・キリストが来られたのは、この目的のためです。そこが出発点です。

では、殺された子供たちはどうなのでしょう。イエス・キリストはまだ幼かったのです。救うことはできなかった。そういうことですか。子供たちを殺された母親たちはどうなるのでしょうか。泣き叫ぶしかない、そういうあ

きらめの世界なのでしょう。もしそうならば、とんだクリスマスです。歩道を歩いていたら、突然に強盗に襲われてナイフで刺され、財布を奪われ、でも犯人は逃げて誰だかわからない。そんな目にあつたのと変わりありません。もしそんなことだったのなら、どこに希望がありますか。

イエス・キリストは私たちに希望を与えるために来られたのではないですか。ならば、殺された子供たちのことも、子供を亡くした母親たちのことも神は、心を砕いているはずではないですか。18節で「ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。」とありました。エレミヤの預言が成就しましたという単純な話ではありません。神が一緒に泣き叫んでおられるのです。母親たちとともに神も悲しんでおられるのです。だから、わざわざエレミヤをとおして神は語られたのです。

神も一緒に悲しんで下さる。そこまではよいとして、でも子供たちは殺されたのです。どんな言葉を語っても慰めることができない、とあります。では、神はどのようにしてこの母親たちを慰めるのでしょうか。「もう大丈夫だ、安心しなさい。」そんな軽い言葉などなんの役にも立たないことを神がよく知っておられます。

母親たちの願いはただ一つです。親ならば誰でも願います。殺された子供たちを返して欲しい。その願いに神はどう応じられるのでしょうか。神はこの母親たちに関わり続けようとされています。決して見放すお方ではありません。であるなら、神は母たちの願いを聞き届けることになります。そうやって、殺された子供たちを取り戻そうとされます。

でも、どうやってそんなことをされるのでしょうか。ご自分のいのちを十字架でお捨てに

なってそうされます。ご自分のいのちを捨てて下さって、失われた命を私たちの所に取り戻そうとされます。それがご自分の民を罪から救うという意味です。

主イエスの耳には、殺された子供たちの声が聞こえています。子供を失った母たちの泣き叫ぶ声が聞こえています。主は、ともに涙を流されます。母親たちの涙を無駄にしない、主は決心されます。

ヨセフのこともマリヤのこともそうです。この二人の悲しみと苦しみにも寄り添って下さいます。「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」主は言われました。

私たちは今自分の罪に苦しんでいます。あるいはほかの人が抱える罪の影響を受けて苦しみに巻き込まれています。主が来られたのはまさに私たちがもっとも苦しんでいることのためにであったことを覚えたいと思います。

主はヘロデのように地上の王となるために来られたわけではありません。むしろ、殺された子供たちを救うために、十字架に進む者として来てくださいました。泣き叫ぶ母親たちを慰めるために、ご自分のからだを十字架につけていきます。

私たちの主がお生まれになった恵みを味わいたいと願います。